



平成30年度国立市市民表彰 教育文化功労 勝嶋啓太氏



～一言で言い表せないことが魅力～

ーCINEVOX公民館映画会のスタッフを始めたきっかけを教えてください。

杉並区在住ですが、公民館映画会に関わるようになったのは、平成7年の夏頃です。当時、雑誌「キネマ旬報」の読者で構成された「キネマ旬報東京友の会」という映画サークルに所属していました。会員の中に公民館映画会のメンバーがいて、「面白い映画を上映しているから、一度来ない？」と誘われたのがきっかけです。当時、自主映画を製作し、上映会を開催していたので、映写や会場設営、ポスター、パンフレット作りを手伝っていました。気がついたら、その当時いたメンバーは様々な事情で誰もいなくなっていました。僕は、辞める理由もなかったため、20年以上続けています。



ーCINEVOX公民館映画会について教えてください。

第4日曜日に公民館の地下ホールで上映しています（入場無料）。上映作品は、邦画、洋画の往年の名作や近年の秀作、ドキュメンタリー映画、アニメーション映画などあらゆるジャンルの隠れた名作を上映しています。

フィルムは味わいがあるいいので、16ミリフィルム版の作品があれば、フィルムでの上映を行っています。

年に2～3回、講師の方をお招きして、上映後に作品に関連したテーマでお話していただく「映画の話」も行っています。



ーオススメの映画を教えてください。

子どもの頃から怪獣マニアで、ゴジラ映画が大好きです。『ゴジラ』1作目（1954年、監督＝本多猪四郎）が、僕の絶対的な映画ベスト1でもう30回ぐらいは観ていると思います。外国映画だと『キング・コング』（1933年、監督＝メリアン・C・クーパー、アーネスト・B・シュードサック）、『フランケンシュタイン』（1931年、監督＝ジェームズ・ホエール）です。どちらも何度もリメイクされていますが、やっぱり一番最初の白黒の作品が好きです。

ー映画の魅力について教えてください。

一言ではなかなか言い表せませんが、あえて言えば、一言で言い表せないことが魅力かもしれません。一口に「映画」と言っても、絢爛豪華な超大作もあれば、低予算だけどヒネリの利いたアイデアで魅せる小粋な映画もあります。人生の深淵や社会問題などを真面目に描く作品もあれば、笑ったり泣いたりハラハラドキドキを味わったりするのを純粋に楽しむような娯楽作品もあります。芸術作品としかいいようのない美しい作品もあれば、見世物感あふれるエロ・グロ・暴力の世界も。時間も何百年先の未来から僕たちが暮らす現在、歴史上の人物が大活躍する何百年、何百万年前の原始時代まで遡れます。場所だって、僕たちが暮らす街から知らない外国、果ては宇宙空間まで、それこそ僕が好きな怪獣や宇宙人のような現実ではなかなかお目にかかれないような非現実的な物だって目の前に飛び出してきたりします。何でもありで、それぞれに楽しさがあり、豊かな魅力があります。何十年見続けても、いや、見れば見るほど「ああ、こんな映画もあるのか！」という発見があって、飽きる事はありません。

ー上映会の活動の中で印象的な出来事がございましたら教えてください。

定員85名のところ、100人を超える来場者があり、混雑して申し訳ないと思う反面、多くの方がこの映画を観たいと思ってくれるのが嬉しいです。毎年1月は、お正月初笑いで、『男はつらいよ』シリーズなど喜劇映画を上映していますが、毎回、多くの方が来てくださり、笑い声や上映後に拍手が起こり、会場の一体感は上映会の醍醐味です。その一方で、観る機会の少ないドキュメンタリー映画の魅力を知ってもらおう「シリーズ《ニッポンの記録映画》」を行っています。平成16年2月の第1回上映から、今年4月でなんと47回を迎え、「こんな企画にお客さんが来るのかな？」という心配をよそに毎回多くの方に来ていただき、本当にうれしい限りです。こういう時が、上映会をやっている本当に良かったと思える瞬間です。あと、個人的には僕が無理矢理企画した『キングコング対ゴジラ』（1962年、監督＝本多猪四郎、2011年1月上映）と『モスラ対ゴジラ』（1964年、監督＝本多猪四郎、2012年11月上映）に予想をはるかに上回る来場者、特に子どもたちがたくさん来てくれ、喜んで夢中で見てくれていたのは忘れがたい思い出です。

※本記事は、平成31年2月に行ったアンケートの内容を記事にしたものです。